

## 初期スミスにおけるスコットランド

—アダム・スミスとスコットランド歴史学派・序説—

山 崎 怜

I. スコットランドの近代化と歴史意識。 II. 初期スミスにおけるスコットランド—物質的貧困と精神的豊富—。 III. むすびにかえて。

### I

ある厳寒の小地域で、しかも短期間に、人類史上に名をのこす一群の知識人が、しばしば相互に血縁かんけいにあるか師弟・親友かんけいにおいて、共通のもんだい関心と方法とをつちかう事例は、長い歴史においても、そうざらにあるというものではないが、18世紀後半のスコットランドはその数すくないばあいのひとつであった。じっさい、そこにうずまいためざましい知的運動の巨大な潮流は、主要な担い手たちの名をあげただけでも、目がくらむ。スミスを別にしてケイムズ卿、ヒューム(叔父と甥)、3人のステュアート(ただしスペルのちがいをふくむ)、ファーガスン、ロバートソン、ミラー、モンボドゥ卿、ハチスンやリード、ジェイムズ・アンダーソンやサー・ジョン・シンクレア、ダルリンプル、ローダーデイル伯やジェイムズ・ミル、ブレアやラムジー、自然哲学(科学)者の群ウォットやブラック、カレンやハットンやジョン・アンダーソン、<sup>1)</sup>そしてキャンベルやバーズやスコットなどの文人たち。<sup>2)</sup>

1) L. Hogben, *Dangerous Thoughts*, London, 1939, The Theoretical Leadership of Scottish Science in the English Industrial Revolution, pp. 223—43; J. G. Crowther, *Scientists of the Industrial Revolution*, 1962. 鎮目恭夫訳『産業革命期の科学者たち』(岩波書店), 1964年10月。後者は最良の案内書であるが、訳文には疑問がのこる。

2) こうした群像については、H. G. Graham, *Scottish Men of Letters in the Eighteenth Century*, 1901; J. H. Millar, *Scottish Prose of the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, 1912; J. G. Fyfe (ed.), *Scottish Diaries and*

たとえば『アイヴァンホー』の作者スコットは甥ヒュームの門弟であり、後者はミラーの直弟子（「寄宿学生」）であり、ウォットとは談笑の仲間たるミラーはケイムズやヒュームやスミスの愛弟子であり、カレンはミラーの恩師であるだけでなく、その娘はミラーの長男に嫁し、ブラックはカレンの弟子であり、スミスのいとこダグラスはミラーの直弟子（「寄宿学生」）であるとともにスコットの学友でありスミスの相続人ともなったが、ブラックの方はハットンとともにスミスの遺言相続人であった。他方、詩人バーンズはファーガソンの家でスコットにはじめてあい、スミスはバーンズに仕事を世話しようとしたことがあり、バーンズはスミスをたたえてやまなかった。

この話は、さらに画家ラムジーはヒュームの友人であり、ミラーの弟子ミューアはジョン・アンダースン擁護の檄文をかいてグラスゴウ大学を追放され、ミラーの長男もまた、云々というように無限につづくが、いまはこれ以上かく余裕はないし、その必要もないだろう。スコットランドという血縁のないしは地縁の小地域のなかで形成された知識人の一団があり、「北方のアテネ<sup>3)</sup>」とよばれた首都エディンバラと商都グラスゴウのまわりに「哲学者」集団がうまれ、たとえば人は叔父ヒュームをその「北方のアテネ」における「ソクラテス<sup>4)</sup>」になぞらえたことを確認すれば十分である。

ところで、当然ながら、ただちに、なぜにそうした僻遠の寒地にかくも燦然たる1大集団が生じたか、という疑問がわかざるをえないが、それを解く鍵のひとつはかれらに共通したもんだい関心をかえりみることであろう。かれらは、口を開けば、粗野未開社会ではこうだが文明社会ではこうだ、古代ではこうだが近代ではかくかくだ、狩猟時代には、牧畜社会では、封建制では、商業社会では——という。ある真実をのべるばあいに、かれらはかならず、かかる社会構成の限定と相対比較をこころみる。それだけでなく、近代にかぎれば、フランスでは、イングランドでは、オランダでは、グレイト・ブリテンでは——

*Memoirs 1746—1843*, 1942; J. H. Burton (ed.), *The Autobiography of Dr. Alexander Carlyle of Inveresk 1722—1805*, 1910.

3) M. Joyce, *Edinburgh: The Golden Age 1769—1832*, 1951.

4) "the Socrates of Edinburgh," Dempster, *Letters to Fergusson*, p. 22. cit. in: E. C. Mossner, *The Life of David Hume*, 1954, p. 391.

とやる。まったく辟易するほどだ。しかし、それは、じつに、かれらにとっては、のびきならぬ重大事であった。<sup>5)</sup> この方法によってのみ、第1に、自然的なものとなりの人為的なものを区別し、人類史をこの自然的なものの貫徹・実現過程(自然史)とみなしえたのであり、第2に、ある不変のカテゴリが歪まずにそのものずばり実現しうるかどうかは、ひとえに一定のそれにふさわしい社会形式と政策装置とをもちうるかどうかであるとする条件分析を成功させたのであり、第1の進歩主義と第2の相対主義とは、あわせもって、後進的な国民には楽観的な鼓舞を、先進的な爛熟国民には冷静な用心を、喚起しうるのだった。

かんがえてみるまでもなく、かれらのおおくが歴史家であった。そのうえ固有の歴史家でない刑法学者や市民法学者や道徳哲学者や裁判官や議会議事録編纂者や技術者や画家や作家でさえも、それらの方法と執念の対象は刑法史であり法制史であり道徳(観)史であり判決史であったし、科学史であり政治史であったのである。<sup>6)</sup> かれらの職業としての分属は、かれらが分業の骨化を批判したように、たんに名ばかりであって、要するにかれらのすべてが高度な意味で歴史家という全人であった。そして作家や詩人はしばしば歴史小説家であり国民作家であったし、画家は歴史における国民的人物をえがきつづける。小説家スコットは、スコットランドの国民的な叙事詩たるボーティアス暴動を背景とした『ミドロジアン人の心臓』をはじめとする一連の作品をかいたし、画家ラムジーは政治史的著作をかきながら、わが歴史家集団や同時代スコットランドの国民的人物の重宝な肖像を連作したのである。

こうして、もし、かれらの方法が一定の確然たる歴史意識ともいふべき強烈

5) この方法が後進国ドイツに生じた歴史学派、とくにマルクスのそれであり、スコットランド歴史学派がそうしたものの先駆であったことに注意すべきである。

6) 例を自然科学者にとれば、カレンにしろウォットにしる、たんなる技術屋でなく「哲学者」であったことの意味、スミスの天文学史の仕事がハットンの地球史・宇宙史やブラックやカレンの自然にかんする思惟とかさなりあうことの意味から、スコットランド歴史学派における自然科学者たちの役割が、技術的生産力という動因把握からする発展史観だけでなく、デュフォンの Natural History の構成にも貢献したことにあるとすれば、動因および構成の両面から歴史意識の成立にかんげいした自然科学者たちの寄与はいよいよ決定的なものとなる。

な方法意識にうらうちされたものであり、かつまた、それが進歩主義と相対主義とを合一して内包するものであるのならば、18世紀後半スコットランドこそは、かかる歴史意識をうみおとす恰好の地であった。

まず第1に、この時代こそは、いわゆる文明の危機に触発された古代=文明論争が、全ヨーロッパ的苦悩のなかから、展開したのであった。それは、イギリスでは、重商主義の危機と解体、内における小生産者のラディカリズムと外における植民地アメリカの独立、宿敵フランスにおける絶対王制の危機とフランス革命、それぞれの側の内部での不安定と動揺からくる、ふたつの英仏戦争という、この2大帝国の対立を中心とする全ヨーロッパの重荷から人類を解放するうえでの思想史上の対立であって、やや対比的にいえば、前者ではアングロ・サクソン主義がおどりでたように、過去の「経験」としての黄金時代が登場するが、後者ではルソーに鮮明なごとく原始と文明とが鋭角に対決した。

第2に、この18世紀後半という時代には自然科学や技術上の発展と重商主義的世界貿易の進展による探険・冒険・通商・旅行につれて、人々はヨーロッパの外にある諸民族の風俗、所有形態、生産=労働様式を「発見」し、これらの知識によって初期未開社会の類推と具象化がなされ、文明としての近代ヨーロッパとの対比が可能になり容易になった。

だが、この2点はヨーロッパ史的課題と条件を一般的に提示したものであり、あきらかに、スコットランドだけがもちえた歴史意識、とくにかの進歩主義と相対主義とを内実とする歴史意識を特殊スコットランド的に説明するものではない。もんだいはむしろ、なぜにスコットランドが以上の2点を独自に意識せざるをえなかったのか、という特殊スコットランドの理由にある。

そこで第3に、進歩主義をとりあげ揚言するためには、歴史のある時点における、たんなる最先進国でもたんなる最後進国でも不可能であり、できうれば最後進国であって、同時にみずからが最先進国に近づくという楽観的な展望がなければ成立しえない。これをほぼ満足しうるのは、おそらくスコットランドだけであった。なぜなら、優越した最先進国はみずからを政策論的に絶対化することしかできないし、それ以外の必要もないから、わざわざ歴史的に回顧したり比較したりする迂回生産に無関心でありうるし、あらざるをえないとしても、後進国の方は現時点の貧しいみずからの位置を、先進国の支配と専横とか

らの衝撃をうけながら、計測してその成長をひそかに期するのであって、それは先進国の歩んだコースを歴史的に再構成しつつ、みずからの位置と能力とを逆照射するほかに脱出の道はない。だが、もし、その後進国が先進国に上昇轉化しえない絶望的な後進国であるとすれば、そこでは悠長な歴史進歩主義ではなく、最先進国とは反対の符号をもち絶対値をひとしくするような絶対化が生ずるだろう。不均等発展の同時進行を前提とするならば、こうした事態はひとつの必然であるだろう。

数百年にわたり最先進国イングランドにいじめられつづけのスコットランドが政治的に前者と合邦したのは漸く1707年。合邦はかえって両者の差異をきわだたせ劣位の側を刺戟しただけでなく、後者は満喫していた大陸との貿易を放棄させられ、ポーティマス暴動や2度のジャコバイト叛乱に明白なように、煮え湯をのまされる。しかし合邦の経済効果は世紀の後半に北アメリカ植民地とのタバコ貿易を核として累増する。後進性が一挙<sup>7)</sup>に最先進性と隣りあわせとなり、これに「同化」させられたという事実ほど進歩主義の歴史意識の成立に重要なことはない。その後進性が後進的であればあるだけ、そうした国では、もっとも古くさい生産様式が急激に崩壊し、つぎつぎに、しかも、短時間に、さまざまな生産様式のとる社会形態の生成と衰微の光景を1世代の人間のいわば肉眼に visible にするのであった。18世紀後半のスコットランド人というのは、遺制を附着させながらも、氏族制・奴隸制・封建制・資本制をいわば一挙に飛躍し通過する、世界にも稀なみずからの痛々しい国民史に接しえたのであるから、かれらには書物や人伝にたよらずに、ひとつの眼で氏族制も奴隸制も封建制も資本制をもみまもることができたし、あたかも記録映画でもみるように、それらが音をたてて崩壊し生成する歴史を1個の絵巻として、まのあたりにしえたのである。したがって、スコットランドの近代化における、いわゆる

7) このスコットランドにおける後進性の急速な瓦解については、とくにその高地地方を念頭にして叙述されたマルクスの「本来の意味における『土地清掃』が何であるかは、近代ロマン文学の約束の地たる高地スコットランドにおいてのみ、これを知りうる。そこではこの過程が、その組織的な性質によって、それが一挙に遂行される規模の大きさによって、……そして最後に、収奪された土地所有の特殊な形態によって、特色づけられる」以下の文章と脚注（『資本論』第1部第24章）を味読せよ。別の機会にもふれるつもりであるが、マルクスのスコットランドへの言及は、さすがにするどい。

「急速性」とは、たんに生産力(量的)の急速な増大であるのみでなく、生産様式または社会構成(質的)経過の「急速性」である点に、とくに留意すべきなのである。

それだから、18世紀スコットランド人によれば、かれらのいわゆる狩猟・牧畜・農耕・商業の自然史が人類史として肉眼にみえる真実であるわけだし、4段階のあとの方ほど卓越したものとされたのであった。かれらの歴史進歩主義は、最先進国イングランドに敵対し、それに軽侮される後進性をもちながら、その最先進国に合体し、それと運命をともにするという、いわば地すべりの近代化をみずからの国民史としてもつ、18世紀のスコットランドにおいてのみ成立する。そういう内的衝動のゆえに、一方では、大陸諸国の古い生産様式や未開諸民族の生活様式に、あるいは貿易をとおして急速に近づいたアメリカ・インディアン部族やその他の非西ヨーロッパ諸国民に、無関心ではありえない面と、他方では、とくにイングランドを頂点にもつ文明を称讃するブリテン人一般として自己意識、イングランドにわたってブリテン人として名声を博する上昇転化、ないしはイングランドの近代化や自国内スコットランド低地での近代化に無関心でありえない面とが、複雑に交錯したのである。<sup>8)</sup>

同時に、第4には、相対主義をみぬくためにも、上記の条件——本来できる

8) 以上の諸点は、近代日本における歴史意識の生成にもひとつの示唆をあたえるはずだし、スミス研究の異常さのひとつの説明をなすものとみられる。日本が「近代化」の最後進国として出発しつつ独立国の資格で上昇転化する資本主義国(最後の「近代化」)となった、これまた世界に稀有な事実は、国内での急速な社会構成のメタモルフォーゼと継起を内包せざるをえないとともに、日本以外の先進諸国と日本以下の後進国の事情に断えざる関心をおこさせたのであった。日本人は何かというと、イギリスでは、またドイツではこうだが日本ではこうだといひ、昔はあだが現在はこうだといひ。あるいは東北では、関西では——とやる。急速な、生産様式と社会構造の転変が極度に斬新なものと極度に古くさいものを同居させたのである。ここでもひとつの肉眼でさまざまな社会構成をまのあたりにしうるし、汽車で田舎から帰京する数時間のうちに4段階を一挙に経過するぐらいだから、その東京の内部にすら4段階が同居している多忙さである。日本人の歴史好きはこうして偶然でないといひうるし、スミスにリカードゥよりも魅力をかんだり、ドイツ的思考やマルクスの方法にひかれるのもそうであるのだが、このことをおさえるには、近代日本の急激な「近代化」の指標を成長率のたんなる量的な高さではなく、まず社会構成の急速な転変にもとめなければならない。

だけ後進的であって、なおかつ上昇転化しうる条件を必要とする。最先進国でも、上昇しえぬ後進国でも；みずからを絶対化する、方法としての絶対主義をもつだけであり、社会構成のそれぞれの個性を意義と限界の双方から評価する相対主義をとりだすことはできない。急激で地すべりの近代化のあった国では、一方では先進国の抑圧や地すべりによる矛盾の大きさと、他方ではその先進国を手本とせざるをえないことのために、地すべりの基礎たる経済進歩を是認しつつも、そうした進歩につきまとう欠陥を意識し究明する。「ブルジュワ的進歩」を容認しながらそこに随伴する病気を後進国の「精神」によって克服するわけであり、逆に絶望的な後進国にたいしては、前者の進歩をつきつけるのであった。とすれば、この相対主義が経済主義を支持することによって、逆に「精神」をもちだそうとすることも自明であろう。相対主義は、かくして、各社会構成の相対認識を「物質」と「精神」のからみあいまで拡張する。後進性の拠点から「精神」とそれを実体化させる上部構造とがでてくる。「ブルジュワ的進歩」と「精神」の両刀づかいであればこそ、すでにのべた「鼓舞」と「用心」の両者をよびかけうるのである。

おおよそ、このような構図のなかで18世紀後半のスコットランド人たちは歴史意識の旗をかかげた。スコットランドの近代化は、みずからの自己認識として、雄大な歴史意識を作出せざるをえないのだった。

文明の危機に直面して、ブルジュワ的進歩主義と「精神」とを提出したが、わがスコットランド歴史学派であるとすれば、「歴史家」たちには、「ブルジュワ的発展=進化」を強調するものと「精神」を高唱するものとの、両極を軸として、さまざまな変種があるはずであり、かかる変種にたちいった考察をくわえることなしに、わが歴史学派の全体像をくみたてることもできなければ、統一的性格を議論することもできない。

変種への接近もまた幾とおりもかんがえられるが、ひとつの深刻な検出事項は、「歴史家」たちを育て、かれらがそのために生き活躍した祖国であり舞台であるスコットランドをどうとらえたか、それを他の諸国とどう比較し位置づけたか、というもんだいであるとおもわれる。英仏対立の総決算のただなかにあって、長年のあいだイングランドに侮蔑され、おおくの差別と侵略とをうけたスコットランド、そのゆえに海の彼方フランスとの交流と親交とをかさねて

きたスコットランド、にもかかわらずイングランドと合邦しグレート・ブリテンの1分子として、苦杯をなめながらも、やがては上昇していくスコットランド。その祖国をイングランドやフランスやアメリカや、大陸諸国などの諸対立のなかにおいて、どうとらえたか、あるいはそれに呼応するスコットランド内部での、かの急速な社会構成の転変をどうみたか、という、それは視角である。とはいえ、いうまでもなく、そのような作業をこの小論で本来的になしうるわけではないのであり、以下の作業はかれらのスコットランド認識をとらえる手始として初期スミスの所説を準備的にかえりみることでしかない。

## II

さて論述の便宜上、結論からいえば、全スミスはイングランドの「物質的富裕」とスコットランドの「精神的豊富」とを結合させた。歴史目標におかれた文明社会の総体は、イングランド的先進とスコットランド的後進の統一なのであって、断じて前者だけの単独社会ではないのである。それだから「物質」と「精神」の両者は相反的に把握され、わがスコットランドは物質的に貧しく精神的にゆたかな国として描出されるだろうことは容易に想像しうるのである。

そのことをあらかじめ総括してみると、大体つぎのようになるであろう。

富裕な文明社会を物質的な基礎過程でまずおさえる。そこでは第1に技術的＝社会的分業が風靡し、人々の職業分担と工場内分業が蔓延している。第2にこれをうらがえせば、分業の歴史的・論理的前提たるストックの蓄積ないしは資本の蓄積の進展を意味するから、このことは直接的生産者の生産的労働者——利潤を自己の価値とともに附加する——への転化、資本蓄積の不断の発展による労働者需要の増加を内包し、かくして第3に高賃金体系が成立する一方、第4に生産力の増進による諸商品価格の低下を招来しうる。高価な賃金と安価な商品の両立。さらに第5には、この社会を構成する3階級の各々は資本蓄積による富裕の果実を調和的に享有するのであった。<sup>9)</sup> 文明度を物質的に計

9) 厳密にいえば、資本蓄積の3階級所得への影響を、土地・資本・労働の1単位にたいするばあいと、社会的生産物の相対的分配へのばあいとが区別され、前者では賃金と地代は増大し利潤は減少するが、後者では賃金と地代は相対的に減少し利潤は増大すると解釈される。このあいまいな2規定の両用によるスミスの真意が資本蓄積のための有



測する指標は、こうして(1)分業、(2)資本蓄積、(3)高賃金、(4)安価な商品、(5)単位面積あたりの地代の増加、(6)住民の収入における利潤部分の増大、の6つとなる。

しかしながら、もんだいははここからはじまる。通常あやまって理解されるように、文明社会は以上の分業＝蓄積体系のみの単純な自己完結におわるのではない。それはいくつかの強力な国家政策を必然化する。富裕な文明社会こそは周囲の羨望する敵意にさらされるのだから、訓練をへた常備軍によって防衛されなければならない。それは「国家の英知」のつくりだした「分業」<sup>10)</sup>にほかならぬ、とスミスは宣告する。つづいては「金持を貧乏人にたいして防衛する」司法的權威の確立がうたわれた。だが、これらのことは、スミスの本意においては、上記の基礎過程分析への奇異な追加でも例外でもなかった。なぜなら、冒頭に分業論こそは、他に本業をもちながら戦士となる未分業の民兵制(スコットランド史)を批判して常備軍を主張し、おなじく封建的な未分業の大土地所有者に帰属した司法権(スコットランド史)を論難して政府の司法的權威をひきだす後半体系の叙述を表象にかへてのみ成立しうるものだからである。事情は、個別利潤原理の適用しえないとされた公共事業および公共施設でも同様であるのだが、われわれはここでスコットランド人スミスの重大な指示にであろう。それは、あれほど、称讃してやまないはずの分業の深刻な「欠陥」を滔々とまくしたてたあと、「教育」による克服を提案したことであった。文明社会における労働者のある特定の分業化は、「かれの知的、社会的、および軍事的な徳を犠牲にして、獲得される」<sup>11)</sup>のであり、分業社会の人民の大多数は「精神的不具、畸形、墮落」<sup>12)</sup>に呻吟するのに反し、未開状態では「各人の多様なしごとのために、各人は、かれの能力を発揮せざるをえなくなり、たえず発生

利な動機と条件を説明し、同時に社会における全階級への調和的な効果の指示にあることはたしかである。なお、このふたつの区別については、内田義彦「スミス『国富論』体系」、『経済学史講座』第1巻、有斐閣、1964年5月、130—31ページ、注(2)をみよ。

10) Adam Smith, *Wealth of Nations*, Cannan's ed., vol. II, pp. 191—92. 水田洋訳『国富論』<下>、世界の大思想 15、1965年7月、154—55ページ。とくに、この「分業」は「国家の英知」によってのみ導入しうるとスミスはいう。

11) *Ibid.*, p. 265. 邦訳<下>、201ページ。

12) *Ibid.*, p. 272. 邦訳<下>、205ページ。

する困難を除去する手段を、発明せざるをえなくなる。発明力はいきいきとしたままに保持され、人間の精神は、文明社会ではほとんどすべての下層階級の人々の理解力を麻痺させるようにみえる、あのねむったような愚昧におちいる<sup>13)</sup> ことがない。このばあい、文中「人間の精神」(初版)が以後の版では、たんに「精神」に訂正されたように、わがスミスは人間の値うちを「精神」にみるのであって、分業による「武勇の精神」の欠如に起因した「臆病」をかれは「精神的不具」と名づけ、この方が「肉体的不具」よりも「悲惨」とするのである。<sup>14)</sup> スミスの胸中にはスコットランド的ないしはハイランド的尚武の精神が去来したことはまちがいがいい、そのうえ、かかるイングランド的腐敗の匡正策として、スコットランドにおける、まさに「精神」の制度たる(1)民衆のための教区学校、(2)進歩的大学、(3)民主的な宗教制度を揚言したのであった。もとより、このこともまた冒頭の分業論において明確に意識されていたはずのものである。それであるから、『諸国民の富』の全構成はもちろんのこと、特殊的には第5篇第1章経費政策に示されるスミス国家論こそは、祖国スコットランド史を否定的＝肯定的に媒介してのみ成立しえたのであった。

とはいえ、以下、小論では、さしあたり初期スミスのいうことをやや詳細にきいてみることにしたい。

初期スミスのスコットランド観をとりあげる理由は、終始かわらぬスミスの一貫性とともな深化をおのずから明示するだけでなく、未完のトルソにこそ作者の生のテーマがむきだしになっているからである。

**物質的貧困** 全スミスの貧困度の物質的な指標は、さきの文明度の逆をいえばよい。(1)分業の欠如(個人的＝地域的アウトアルキー)、(2)資本蓄積の低位、(3)低賃金、(4)高価な商品、(5)単位面積あたりの地代の僅少、(6)住民の収入における利潤部分の寡少。さらにスミスのばあい、かかる指標の成立条件、たとえば分業の欠如はその条件たる市場の欠落に、そして後者は奴隸的・封建的収奪に起因するという具合に、いつも指標成立の体制的条件に遡及する点にあり、その所以はすでにくりかえし指摘したスコットランド近代化の「体制転換の急速

13) *Ibid.*, p. 268. 邦訳<下>, 202ページ。

14) *Ibid.*, p. 272. 邦訳<下>, 205ページ。

性」に由来することも自明であろう。歴史認識と体制認識とは、スコットランド歴史学派にあっても、同一異名なのである。もし、そうであれば、貧困度の物質的な指標には、6つの指標のほかに、是が非でも(7)として体制的な後進指標(狩猟・牧畜・農耕、あるいは奴隷・農奴制)をふくめなければならない。

こうした指標は、すべて初期スミスにおいて、すでに色濃く表象されていたはずのものではあるが、『講義』では「市民社会」の編成の学としての法学構成——「市民社会」の解剖の学としての経済学に体化しない——であるためか、また『草稿』ではあまりにも断片的な解剖学の道具立てであるためか、いずれも上記のうち分業の欠如や低賃金<sup>15)</sup>などについてはスコットランドの地名をあけて固有の経済学視点から言及することはしていない。<sup>16)</sup> 祖国の名を明記して物質的貧困を憂えたのは主に資本蓄積の低位であり、その条件たる体制的な後進指標であった。しかし、それは解剖の学としての未完とたちおくれとを露呈すると同時に、じつはスミスの初心がどこにあるかを示していたのである。資本蓄積の社会的条件と法制的条件。両者は、それぞれ『道徳感情論』と『講義』の主題——物質的もんだいに焦点をあわせれば——であった。<sup>17)</sup>

15) スミスは、『講義』や『草稿』においては分業の発展は商品を安価にし労働を高価にするという。物質的貧困は事実上これをうらがえしてよみとればよい。Cf. A. Smith, *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms*, Cannan's ed., 1896, pp. 164—65. 高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』(日本評論社), 1947年11月, 327ページ; do., *An Early Draft of Part of the Wealth of Nations*. in: William Robert Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, Glasgow, 1937. 水田洋訳『国富論草稿』<世界古典文庫>, 1948年11月, 63—5ページ。

16) もっとも唯一の資料たる『講義』と『草稿』は、ともにスミス自身の公刊したものでなく、また包括的な内容をもつわけでもないから、初期スミスの規定として、これを断定することはひかえたい。ロージアンが発見した、新全集に収録される予定の講義筆記ノート公刊はその意味で固唾をのんでわれわれのまつところであるとはいえ、それもまたスミスの手を経たものでないことは、やはり注意すべきことである。

17) したがって資本蓄積構造の如何こそを「同感」の理論と歴史認識とをからませて究明するのが初期スミスのひとつの課題であり、そこから初期スミスと後期スミスとをつなぐカテゴリーの経済的中间項は資本蓄積となるであろう。道徳と経済の媒介となる法ないし正義というのは、極北たる市民社会で成立する平等の商品所有者間の法ないし正義を前提したうて、なによりも未開・牧畜・農耕・商業(重商主義)時代での正義の欠落とその開花過程とを、直接生産者と奴隷主や封建地主や大商人とのかんけいのなかでの、

Jurisprudence を対象とする『講義』は、その独自の法社会学的手法によって公法・私法・家族法におけるスコットランド法の特異性を指摘したり、また治政におけるスコットランドの後進性を血書する。もちろん、それらは聴講者に若い前途あるスコットランド青年をむかえてのことである。だから、『講義』での、「この国」や「わが国」というのは、しばしばスコットランドであり、「われわれ」とか「諸君」とかはわが同胞スコットランド人の自己認識とよびかけなのである。「スコットランド」のことばの使用はかならずしも必要ではない。たとえば、「諸君は、諸君自身の土地を流れている河中の大きな魚をとることはできない」<sup>18)</sup> とするばあい、これはキャナン注にもあるごとく、スコットランドの鮭の漁獲を指したものであり、<sup>19)</sup>「わが国の家族の状態は特異であって、われわれの法律とローマ人の法律とのあいだにひとつのいちじるしい相違を生ぜしめた。われわれのあいだでは、妻は娘よりもずっと重要な人格であり、したがって娘より余計に相続する」云々とされるのも、<sup>20)</sup> わが祖国スコットランドの抽出なのである。そうした調子で、限嗣相続の講義箇所では、「わが国の習慣によれば、人がもし後に妻子をのこすならば、かれは遺言によってただ3分の1しか処分できない」<sup>21)</sup> とのべたあと、つぎのように限嗣相続制を批判した。「およそ、永久限嗣相続制ほど不合理なものはありません。ここでは、遺言相続の原則はけっしておこなわれることができない。死者にたいする敬虔の念が生ずるのは、ただその記憶が人々の心中に新鮮であるときだけである。だから永久に地所を処分する権限というものはあきらかに不合理である。土地とそのゆたかな産物は、あらゆる世代のものに属している。そして先の世代は、それを子孫からとりあげて縛りつけておく権利をもたない。かかる

---

蓄積源泉の帰趨形態の法的条件として、批判的に抽出されたものであるから、正義論を経済学的に翻訳すれば蓄積論そのものなのである。スミス社会科学体系ともいべき道徳哲学内部における、倫理と法と経済の媒介論理の对象的環は蓄積範疇にあり、それだからスミス政治経済学体系における基礎理論と国家論とを媒介するものはおなじく蓄積範疇であり、かくして一般的に表現してみれば、それはスミスにおける主体と理論の結節点に位置する。

18), 19) A. Smith, *op. cit.*, p. 110. 邦訳, 247ページ。

20) *Ibid.*, pp. 115—16. 邦訳, 255—56ページ。

21) *Ibid.*, p. 123. 邦訳, 268ページ。

所有権の拡張はまったく不自然である。限嗣相続制がしらずしらずのあいだに発展したのは、死者がともかくひとつの権利をもっているとするれば、その権利がどこまでおよぶるか、人々が知らぬためであった。限嗣相続の最大限度は、当人が死んだときに生きている人々とすべきである。というのは、かれはまだうまれてもいない人々に愛着をもちえないからである。限嗣相続制は1国の進歩にとって不利益である。この制度がまったくおこなわれなかった土地は、つねによく耕作される。すなわち限嗣相続地の相続人は、土地を耕作しようというかんがえはなく、しばしばそれをなす能力がない。土地を買うものはまさにこれのかんがえる。一般に、あたらしい購入者は最良の耕作者である』<sup>22)</sup>と。

激しい論難の口調には、わがスコットランド現行の限嗣相続制とそれによる生産力の阻止への怒りがよこたわる。それはいわゆる長子相続制批判と軌を一にし、後者のいわばスコットランド的現代版として、とりあげられたのであった。長子相続制については、「われわれは長子相続権が農業を妨げることに注意しなければならない。もし全所有地が息子たちのあいだに分割されたならば、各人は、ひとりて全部を改良しうるよりもっとよく、各自の持分を改良する。のみならず、小作人はけっして田畑をそれが自己の所有であるかのごとくによく耕すものではない。長子相続は家族にとってもまた有害である。というのは、それはひとりの給与を満足させながら、他方、のこりのものをすべて、2, 3代のあいだに物乞いの窮状におとしいれるからである』<sup>23)</sup>とスミスはいうのだった。それだから、土地の分割と売買を禁ずる土地独占にかんする、かれの総括はこうである——「数箇の事情が相助けて土地の独占を継続させた。長子相続権はかなり早く樹立され、所有地の分割を妨げた。限嗣相続制は今日にいたるまでこれとおなじ悪い結果をともなっている。所有権の移転にかんする封建法の妨害もまた、農業の進歩を阻止した。……土地を市場にださないことはつねにその改良を妨げる。一筆の小地を買う商人は、その改良に着目し、できるだけこれを利用する。名門旧家が、かれらの邸宅の周囲にある小さな遊び場

22) *Ibid.*, p. 124. 邦訳, 268—69ページ。

23) *Ibid.*, p. 120 邦訳, 262ページ。

以外の領地を改良しようという、資財や意向をもっていることは稀である。<sup>24)</sup>

封建遺制による生産力と資本蓄積の阻害はこれだけではない。「隷農がなくなったあと」の「分益小作人 *tenants by steel bow*」がそれである。「地主は耕地を資財とともに隷農にあたえ、それはその年のおわりに生産物の半分をそえて地主に返還された。しかしこのテナントは資財をもたず、あるいはもっていたとしても、これを土地の改良に投ずべき何の奨励もなかったから、この方法はつねに農業にとって不利であった。10分の1税が農業者からその生産物の10分の1をうばうことにより土地の改良を妨げたとおなじ理由で、これはより高い程度における、ひとつの妨害物であった。なぜなら、このテナントはその生産物の半分をうばわれたからである。フランスのかんりの部分は、いまなお分益小作人によって耕作されている。そして、スコットランドのハイランド地方のある部分にも、それがのこっているそうである。」<sup>25)</sup>

ところで「労働が分割されるまえに若干の資財の蓄積が必要である。何のストックもない貧者はけっして製造業をはじめることではできない」<sup>26)</sup> のだから、「未開野蛮な民族は分業の諸効果を知らない」<sup>27)</sup> であろう。私人間に分業がないとすれば、公私の分業もまたありえない。領主の司法権や軍事権もそのひとつである。「首長は、その勢力が大きいことから、かれら自身の領地における唯一の正義〔裁判〕の主宰者であった。この司法権をみとめることは政府の利益であった。というのは、それは平和を維持する唯一の方法であったし、またこの支配者は、平時においても戦時においても、指導者であったからである。1745年にいたるまで、この権力はスコットランドのハイランド地方に残存して、ある郷土のごときは、数百人の人員を戦場につれていくことができた」<sup>28)</sup> し、一方、臣民からの義務についていえば、「従士の領主にたいする義務は、イングランドよりもスコットランドにおいて長くつづいた。それは双方の統治の相異から説明されえよう。というのは、イングランド政府は、はじめからず

24) *Ibid.*, p. 228. 邦訳, 417ページ。これは、以下の注25, 35, 41とともに「富裕の進歩のおそい諸原因」の説明のなかでの例示であった。

25) *Ibid.*, p. 226. 邦訳, 414ページ。

26), 27) *Ibid.*, p. 223. 邦訳, 408—9ページ。

28) *Ibid.*, p. 116. 邦訳, 257ページ。

と民主政治を擁護し、スコットランドのそれは貴族政治を擁護してきたからである。」<sup>29)</sup>

しかも、こうした上からの司法権や軍事権、下からの従士の義務がきびしくはりめぐらされたにもかかわらず、いな、それゆえにこそ、犯罪と私掠と強奪とがはびこるのである。パリとロンドンとを比較して、前者では規制あるにもかかわらず、犯罪が生起し、逆に後者では規制なくしてそれは皆無にちかい。「封建的風習の遺物が保存される」パリでは貴族に依食する郎党が召抱えられ、ひとたび「主人の気まぐれによって解雇される」と重罪を犯してでも糊口をみたさざるをえないが、ロンドンでは独立した商人が「正直で勤勉な」徳をみかく。<sup>30)</sup>「従属ほど人間を腐敗させるものはなく、これに反して独立は人々の正直をさらに増進する。」<sup>31)</sup>なぜなら、「いかなる国にあっても、商業が導入されるときには、いつも誠実と几帳面がそれにとまらう。これらの徳は、未開野蛮な国ではほとんどみられない。ヨーロッパのすべての国民のなかで、もっとも商業的なオランダ人が、自己のことばに一番忠実である。イングランド人はスコットランド人よりも、その点でまざっているが、しかしオランダ人には大いに劣る。そしてこの国の僻遠の地域の人々は、商業的地域よりはるかに劣る。これはある者が主張するようにまったく国民性に帰するべきではない。というのも、イングランド人またはスコットランド人が、約束の実行においてオランダ人のように几帳面でないとする、自然的理由がないから。それははるかにおおく利己心に帰することができる。利己心は、各人の諸行為を規制し、人々を導いて利益の観点から一定の仕方で行動させる普遍の本能であって、イングランド人のなかにもオランダ人とおなじくふかく根をおろしているものなのである。商人は、評判をおとすことをおそれて、すべての約束を几帳面にまもる。」<sup>32)</sup>そこでパリとロンドンの比較論はそのままスコットランドとイングランドの比較

29) *Ibid.*, p. 126. 邦訳, 272ページ。

30), 31) *Ibid.*, pp. 155—56. 邦訳, 314—15ページ。

32) *Ibid.*, pp. 253—54. 邦訳, 452—53ページ。おなじ例——「誠実は、未開民のあいだではもっとも普通な諸徳のなかにはいっていなかった。誠実と几帳面をもたらすのは商業なのである」(*Ibid.*, p. 234. 邦訳, 425ページ)「民衆の大部分が商人であるときは、かれらはつねに誠実と几帳面さを普及させる。したがってこれらは商業国民の主要な徳なのである」(*Ibid.*, p. 255. 邦訳, 454ページ)と。

に適用される。つまり、「うたがいがもなく、パリとロンドンの貴族はかんげんに同一水準にあるが、パリの民衆ははるかに従属的でありロンドンのそれに比すべくもない。おなじ理由により、スコットランドとイングランドの貴族もまたかんげんにおなじ水準にたっているのに、スコットランドの民衆は、イングランドのそれとちがっている」<sup>33)</sup>と。さらに、この比較論はスコットランド低地における2大都市、エディンバラとグラスゴウの対比に応用されて、かれは政都たる前者では重大犯罪が毎年いくつか発生するが、商都たる後者では「ひとり以上の僕婢をかかえるものがほとんどいないから」それはすくない、<sup>34)</sup>と断ずる。

貧しさと寄食とが掠奪や犯罪をうむのだが、そうした犯罪がまた貧しさをうむ、いいかえると、「商業の改良」を阻止するだろう。「当時、地方には、従者たちすなわち諸侯に依存する一種のなまけ者がみちていたが、かれらの乱暴狼籍はある場所から他の場所へいくのを非常に困難にした。……アジアおよびその他の東方諸国……ではすべての内陸商業は、相互防衛のために数千人からなり荷馬車その他をとまなう大隊商によって営まれる。わが国でも人はエディンバラからアバディーンへいくのに遺言状をつくった」<sup>35)</sup>のである。

経済学への巨歩をふみだす『草稿』においても事情は同一であって、ここでも、「富裕の進歩のおそい諸要因」の叙述のなかで、明示的にスコットランドが登場する。まず第1に、「奴隷による耕作について。／土地は、奴隷によっては、けっしてもっとも有利に耕作されず、奴隷による仕事は、自由人のする仕事よりも、つねに高価になる、ということ。古代のギリシャ人およびローマ人のあいだにおける奴隷耕作の、とぼしい生産物と莫大な費用について。わがサクソンおよびノルマンの祖先のあいだにみられた隷農制について。ドイツおよびポーランドにおける農奴、ロシアにおける農民およびスコットランドの石炭

33) *Ibid.*, p. 156. 邦訳, 315ページ。

34) *Ibid.*, p. 155. 邦訳, 314-15ページ。これは、スミスがみずからの経済学の生誕を、その地で学業をおえ、教授の地位につき、青年・壮年期をその地で活躍した商都を介して、告白した1節である。

35) *Ibid.*, p. 234. 邦訳, 425ページ。「アジアおよびその他の東方諸国」とスコットランドの同一視。



業、製塩業に働いている人々について。]<sup>36)</sup> 第2に、「昔の分益小作人すなわちスティールボウ小作人 *Antient Metayers or Tenants by Steelbow* による耕作について。……これらのことばのうち、第1のものはフランス語であり第2のものはスコットランド語である。この種の借地契約は、イングランドではすでにながいあいだ、おこなわれていないし、スコットランドの、かなりよく耕作されているすべての地方でさえも、そうである。わたしは、現在それにあたるイギリス語があることを知らない。]<sup>37)</sup> さらに第3に、「イングランドにおいて、一定の借地権所有者に国会議員選挙権を賦与した法律から、農業がえた利益について。それによって地主と小作人とのあいだに、相互依存かんけいがつくられ、もしも地主がその州におけるかれの勢力に関心をもつならば、かれは、地代を引きあげたりあるいは小作人に何かその苛酷な搾取をすることを、極度にひかえるようになった。スコットランド人の自由よりもすぐれたイングランド人の自由。]<sup>38)</sup>

いずれもプランと編別構成の要約的羅列にすぎないとはいえ、むしろそれだからこそ、ミスにおけるスコットランドの基本像はかえって鮮明だといえないだろうか。奴隷制と封建遺制とを色濃くひきずっているスコットランド。それだけでなく、かれが自然的障害と名づけた「貧困と無知」<sup>39)</sup> の存在をおそらく、ひそかにそこに帰したスコットランド。<sup>40)</sup> 初期未開時代と二重うつしにかさね

36) 前掲『国富論草稿』〈世界古典文庫〉、125—26ページ。ここはかんぜんに『講義』での、邦訳412—13ページに照応するから、筆者たる学生はスコットランドにふれないが、教授ミスの方はたしかにそれを念頭においていたはずである。

37) 同、127—28ページ。これも『講義』の邦訳414ページに照応する（さきに注25として引用済み）が、ここではスコットランドにはっきり言及し、「ハイランド地方のある部分」という『講義』の説明に、「かなりよく耕作されているすべての地方〔低地スコットランド〕」にはすでないというかたちで、一致する。

38) 同、132ページ。なお、これにつづく133ページでは『講義』におけるとおなじく、例の土地独占の3原因を、土地の譲渡にたいする封建遺制の妨害、限嗣相続、長子相続権に帰し、いずれも「富裕進歩」をおくらせる「原因」とした。

39) 同、122ページ。

40) 周知のごとく、「富裕の進歩のおそい原因」は大別して、「自然的障害」と「圧制的統治」にわかれ、前者は人類の原初段階に、後者はいわゆる広義の文明社会（牧畜時代以降）に生起するのであるが、狩猟時代から一挙に商業時代に入突するスコットランドにとっては、両者は同時的な死活もんだいであったはずであり、ヨコのもんだいをタテ

あわされたスコットランド。「未開社会では、戦争のほかには尊敬すべきものはない。オディシィのなかでユリシーズは、侮辱のしるしとして海賊か商人か、ときどきたずねられる。その当時、商人は憎むべく賤しむべきものとみなされたが、海賊や強盗は軍人のように勇敢なものであったから名誉をあたえられた。……未開時代には、この軽蔑〔商人蔑視観〕は最高度にたっし、開化した社会においてさえそれはまったく消滅してはいない。わが国では今日、小さな小売商は幾分憎まれてゐる。商人や職人の仕事がこのように賤しまれた社会の初期においては、それが最下層の人々にかぎられたのはおどろくにたりない。」<sup>41)</sup>

貧乏な、物質的にみじめなスコットランド。東部ヨーロッパとともに、しばしば初期未開社会の眼にみえる例示となる、また、さまざまな旧体制を背負うスコットランド。資本蓄積の低位と体制的な後進指標をもつスコットランド。あきらかにスミスはイングランド的「商業」の進歩、ブルジュワ的進歩に渴望をかんじたのであり、みずからの祖国をイングランド的路線にのせようとしたのである。『講義』も『草稿』もかかる渴望と展望のなかでのみ成立しえたというべきである。

しかしながら、それはあくまで真理の半分であった。スミスはわが祖国を否定すると同時に肯定した。スコットランドを物質的に否定することによりイングランドを肯定したが、さらにかればスコットランドを精神的に肯定することによってイングランドを否定したのである。<sup>42)</sup>

のもんだいになおして楽観的なものを見方を、タテのもんだいをヨコになおして、ひとつではないぞ、とするスミスの方法を吟味せよ。

41) A. Smith, *Lectures.*, p. 232. 邦訳, 422—23 ページ。別の場所でも「海賊は名誉ある職業であった」(*Ibid.*, p. 234. 邦訳, 425ページ) とスミスはいう。

42) すでに気づかれたように、ブルジュワ的進歩にただちに随伴する社会的倫理、スミスみずからの既知の用語法では、イングランドの「自由」とか「誠実と几帳面」の徳とかは、すべてここでいう「精神」ではない。小論でそれらを「精神」にいれないのは、第1にそうしたものが物質的進歩に必然的に歩調をそろえる、いわば広義の物質的カテゴリであること、第2にスミスが精神ということばのなかに、ひとつは活力のある生き生きとした豪気と勇敢と尚武の精神をはめこみ、ふたつには全人的な思索と哲学、アンジクロペディスト風のひろやかな思考をとくにみだしていたからである。物質的富裕にともなう社会的倫理を、ここで「精神」と混同すればスミスとスコットランドのかんけい、ひいてはスミス社会科学体系の全体構造がみえなくなるであろう。1例をあげよ

**精神的豊富** イングランド的富裕にともなう「不都合」は3点。第1に、商業＝分業が人々の視野を制限し、不具の部分人たらしめる。分業が高度に発達したところでは、「各人はただひとつの単純な操作をおこなえばよい。かれはこの操作に全注意を局限し、したがって、それに直接かんれんのあるもの以外の観念が、かれのところに生ずることはほとんどない。[反対に] ところがさまざまの対象に用いられるばあいは、それはともかくもひろがる。それで、この理由により、田舎の手工業者は都市のそれよりもずっとひろい思考範囲をもっていることが、一般にみとめられる。』<sup>43)</sup> 田舎の手工業者はひとりで指物師でもあれば大工でもあり家具師でもあるから、「かれの注意は非常にことなった種類のおおくの対象にむけられる』<sup>44)</sup> のだが、都市のそれはたんに家具師であるにすぎないので、「その特定種類の仕事がかれの全思考』<sup>45)</sup> を支配する。「かれはおおくの対象を比較する機会をもたないから、自己の職業以外の事物については、けって前者のようなひろい見方をしない。』<sup>46)</sup> 畸型的な部分人と全人、愚人と賢人の対比。そこでスミスはいつのける——「すべての商業国民において、下層民が極端に愚昧であることはあきらかである。オランダの民衆はとくにそうであり、イングランドの民衆はスコットランドのそれよりもそうである。この原則は普遍的である。すなわち都会においては、かれらは田舎におけるほど聡明ではなく、また富国においては貧国におけるほど怜愍ではない』<sup>46)</sup> と。都会にたいする田舎の讚美が精神の不具者にたいする「哲学者」の讚仰となる。

スミスは「おおくの対象を比較する」「ひろい見方」の所有者をくりかえし「哲学者」とよぶ。「従来、応用されなかったあたらしい力の助けを案出する人々は、物事についてひろい見解をもたなければならない。これをさいしょに実行したものが、ひとりの職人であってもなくても、すなわちかれがだれであったにせよ、かれは哲学者だったにちがいない。』<sup>47)</sup> 哲学者たちの熟練もまた

う。物質的進歩にともなう倫理は放任されてこそ実現されるが、「精神」の方は物質的進歩に逆比例するのだから、まさに政府のとりあげるべき公的課題となるという、スミスでの死重のもんだいすら意識しないでかくされる。

43), 44), 45), 46) A. Smith, *Lectures.*, pp. 255—56. 邦訳, 454—55ページ。

47), 48) *Ibid.*, p. 168. 邦訳, 331—32ページ。われわれは、この「哲学者」の規定が

「分業によって増大する」<sup>48)</sup> のであるが、そうした専門のえらばれた哲学者たち——ますます哲学をみがきうる職業人——は別として、大多数の他の民衆はどうなるか。精神的不具者におちぶれるほかのない下層民。

これにたいして、みられるごとく、スコットランドの民衆はイングランドのそれよりも「聰明」であり、貧しい国の民衆は富裕な国のそれよりも「伶俐」なのである。貧しいスコットランドの民衆こそは「哲学者」なのである。こうして「精神」における後進国の優越が主張された。それは、後進国一般の優越であるけれど、むしろ、それ以上に、スコットランド思想の優越であった。なぜなら、その地における民衆ですら「聰明」であり「哲学者」であるのだとするならば、その地の専門的知識人、まさに分業労働の一翼をになう「哲学者」こそ本来の哲学者であるはずであるし、かれらによってうみだされたスコットランド思想こそが真の「哲学」たりうるであろう。「哲学者」としての民衆の思惟をさらに総括するスコットランド知識人の優越的地位の告白と自己認識をわれわれはここにみる。いかえるならば、グレイト・ブリテンが合邦によってひとつの統一体とされるとき、わがスミスにとっては、イングランドの「物質的富裕」とスコットランドの「精神的豊富」との、あるいはイングランドの Industry とスコットランドの Philosophy との統一、<sup>49)</sup> そういう意味における両国の「物質」と「精神」の分業およびグレイト・ブリテン全体としての「全般的富裕」の実現、これこそはスミス社会科学体系の方法的な基調であった。

いうまでもなく、この Industry と Philosophy との統一ということ自体が哲学的方法の所産である。かれによれば、哲学者とは、「何かをするのではなく、あらゆるものを観察することを職業とし、そしてそれによって、まったく

---

『草稿』や『諸国民の富』にも一貫してみられる、のみならず『天文学史』以来のスミスの数々の論説のなかをつらぬく、かれの根本的な自己意識として重視したい。そして、とくに、その自己意識がスコットランド人スミスの自己意識であることに注目したいのである。

49) スミスは合邦という政治的・国民的事業に、このような思想史的解釈をあたえ、そうすることでみずからのスコットランドへの愛とブリテンへの愛とをかきねあわせようとした。それだから、かれのばあい、たんなるスコットランド主義もイングランド主義もともに肯定＝否定される。

対立的でとおくはなれた事物の力を結合することができる。すでに知られていて、またすでにひとつの特定の目的に適用された諸力を、もっとも有利な方法で使用することは、才能ある技術家の能力をこえるものではない。しかし、全然知られていず、また、類似のいかなる目的にもこれまで使用されていなかった、あたらしい力の使用をおもいつくのは、たんなる技術家がうまれながらにもっているよりも、広範な思考と観察を有する人々へのみ、なしうることである。<sup>60)</sup> Industry と Philosophy, イングランドの「商業」とスコットランドの後進的総体認識、未来と過去、それらは「まったく対立的でとおくはなれた事物」であり、「類似のいかなる目的にもこれまで使用されていなかった」はずのものであった。スミスがこれらの「事物の力を結合すること」によって、「あたらしい力の使用」をねらっていることは疑問の余地がないのである。

第2に、「商業にともなう」「不都合」は「教育」が無視されることであって、「富裕で商業的な諸国民にあっては、分業がすべての職業をきわめて単純な諸操作に還元したために、非常に幼少な子供を使用する機会があたえられる。じっさい、分業がそれほどすすんでいないこの国では、もっとも賤しい運搬人でさえ、よみかきができる。なぜなら、教育費が低廉であり、かつ親はその子が6、7才のときには他の方法で使用することができないからである。しかしこの事情は、イングランドの商業的地域には存しない。パーミンガムの6、7才の少年は、1日に3ないし6ペンスを稼ぎうる。それで、両親たちはかれらを早く働かせることが利益であるのを知り、かくしてその教育は閑却される。な

50) 前掲『国富論草稿』〈世界古典文庫〉、78—9ページ。スミスがこのあと、「ほんとうの哲学者だけが、蒸気機関を発明しえたのであり、以前にはかんがえもつかなかった自然力を使って大きな結果をうみだすことを考案しえた」とするの、ウォットの名を秘したうえで、スコットランド人とその思想の「哲学者」および「哲学」たる所以をのべた1節であり、さらにそのあとで「われわれはげんざい、機械学、化学、天文学、物理学、形而上学、倫理学、政治学、商業学、批評学の諸哲学者をもっている」とされたばあい、これらについては小論の冒頭でふれたスコットランド知識人のグループをまず想起しなければならない。スミスの「哲学者」にかんする叙述は、どれをとってもスコットランド人としての自己認識であり、ある種の自伝である。なお、スミスが『哲学論文集』のなかで哲学とは「自然を連結する原理の科学」というのも重要である。一見対立する諸カテゴリーを「連結する」媒介環の発見こそ「哲学者」の任務であった。

るほど、下層民の子供たちがうける教育は、いずれにせよ、大したものではない。しかしながら、それはかれらにとって無限に役だち、その欠如はまさにかれらの最大の不幸のひとつである。教育によってかれらはよむことを学び、それはかれらに宗教の恩沢をあたえる。このことは、敬神の意味からみればあいだけでなく、それがかれらに思想や思索の主題をあたえることからみても、1大利益である。この点から、われわれはカントリ・スクールの利益をみとめうる<sup>51)</sup> という。商業の発展が幼年労働者を雇いし、かれらを教育から遠ざける。ただでさえ分業労働による部分人化が生起するうえに、かかる無教育が拍車をかける。「この国」たるスコットランドでは教育費が安価であるし、分業が未発達なので幼年労働を雇いする機会がないから、貧乏人の子弟も教育をうけることによって、「思想や思索の主題」をあたえられ、いやがうえにも「哲学者」としての性格をみがきうるのだとされるのであった。スミスの心底にはスコットランドでの教区学校を中心とする初等教育の普及度が焼きついていて<sup>52)</sup>

それだけではない。こうした幼年労働は少年たちに、「かれの父がかれのお蔭をうけているのを」知らせ、「したがって父の權威」をかれは「投げ捨てる。」教育も受けず、親をも信頼しえないかれが「成長したとき、かれを慰めうるような何の思想ももたない。したがって、かれは仕事からはなれたときはかならず酒色にふける。それゆえに、われわれはイングランドの商業的な諸地域では、商人たちの大半はこの賤しむべき状態にあることを知っている。かれらの半週間の仕事はその生活を維持するに十分であり、かれらは教育の欠如によって、残余の半週間は放蕩酒色以外に何のたのしみもない。」<sup>53)</sup>

第3の「商業の悪影響は、それが人類の勇気を沮喪させ、尚武の精神を消滅させる傾向」である。分業の結果、戦争もまた「ひとつの職業」として「一定階級の人々にゆだねられ、そこで民衆のあいだには軍事的勇気が減少」し、「人々はかれらのところをいつも奢侈的学芸に用いるので、女々しく卑怯になる。」たとえば、「1745年に4、5千人の無防備無武装のハイランド人が、この

51) A. Smith, *Lectures.*, p. 256. 邦訳, 456—57ページ。

52) このことは『諸国民の富』において、とくに鮮明である。

53) A. Smith, *op. cit.*, pp. 256—57. 邦訳, 457ページ。

国の進歩した諸地域を、その非好戦的住民から何の抵抗も受けずに占領した。かれらはイングランドに侵入して全国民を驚愕させたが、もし常備軍の抵抗がなかったら、かれらは難なく王冠をうばいとったであろう。200年まえには、かかる攻撃は国民の精神を鼓舞したであろう。われわれの祖先は勇敢かつ好戦的であって、かれらのところは商工業の育成によって力をそがれていなかった。かれらのすべては元気はつらつと、もっともおそるべき敵に抵抗する用意ができていた<sup>54)</sup>とし、いくつかの他の諸国の例をあげたのち、さいごに「これらは商業的精神の短所である。人々のところは狭隘になり、昂揚することが不可能になる。教育は軽蔑され、またはすくなくとも閑却され、英雄的精神はほとんどまったく消滅させられる。これらの欠陥の匡正は真剣な注意に値いする」<sup>55)</sup>とわがスミスは、いいきった。あきらかに、かれは尚武の精神、勇敢と精神的昂揚をハイランド人のもつ「英雄的精神」にもとめ、これをイングランドに象徴される商業地域の軟弱と優柔不断に対置する。スコットランドを初期未開社会とかさねあわせたいうで、その精神的優越をこのように主張した。

以上の3点におけるスミスの所説の特徴はほぼつぎのようなものとかんがえてよい。「商業」による「精神」の墮落とは、視野の狭量、酒色、臆病である。いずれも、「すべての商業国においては分業が無限におこなわれ」<sup>56)</sup>人々は単純な作業と単一の職業に特化するために、部分人となり、幼年労働が使用され、「尚武の精神」がうしなわれるところから生ずるわけである。だから、第1に、国防は一定の職業的専門にまたなければならず、当然に、常備軍が必然となる。「それがないところでは、その国は容易に敵の餌食になる。……常備軍がいかにおおくの非難をうけようとも、社会の一定の時期にはそれが導入されなければならない」<sup>57)</sup>まさに、「常備軍の抵抗がなかったなら」、ハイランド人は「難なく王冠をうばいとったであろう。」第2に、「商業」の「不都合」といいながら、事実上それが絶えず「分業」の「不都合」におきかえられるスミスの方法に留意すべきである。なぜなら、「商業」自体が終始もんだいとされるならば、

54), 55) *Ibid.*, pp. 257—59. 邦訳, 458—60ページ。

56) *Ibid.*, p. 257. 邦訳, 458ページ。

57) *Ibid.*, p. 263. 邦訳, 464—65ページ。

放蕩酒色や遊惰な臆病の原因のなかに、貨幣物神や利益追求主義といったものが、あるいは、あげられたかも知れないが、それが「分業」の「欠陥」にすりかえられるとすれば、「商業」のそれは部分的な視野の「狹隘」にのみ集中し、ここから「欠陥の匡正」は職業的部分人を可能なかぎり全人たる「哲学者」にひきあげる手段、つまり教育政策が必然化するのであった。<sup>58)</sup>そして、それらは後進スコットランドにおける民衆の全人的・哲学者の性格、勇氣ある「英雄的精神」と精神の昂揚、教育制度の優越という自己認識にささえられていた。「精神」の国スコットランド。「哲学者」の国、「教育」の国、「尚武」の国スコットランド。これこそは、われわれが「精神的豊富」と名称した所以のものである。

### III

以上においてくりかえし指摘したように、初期スミスはイングランドに代表される「ブルジョワの進歩」と「物質的富裕」とをたたえながらスコットランドの「物質的貧困」とそれをうながしてきたし、現にうながしている体制の後進性をきっぱりと否定した。しかしながら、同時に、そうした富裕なイングランドの「商業」にともなう「精神」の退廃をきっぱりと否定して、わがスコットランドの「精神」と「精神」の制度たる初等教育の普及、<sup>59)</sup>安価な授業料をたたえる。祖国スコットランドこそは物質的には貧しいが故に精神的にはすこぶるゆたかな国として揚言された。こうして、スミスの総体としての文明社会ないし市民社会体系は先進イングランドの「物質的富裕」と後進スコットランドの「精神的豊富」とを統一しえた、相互に補填しあう社会体制なのであった。かれは、しばしば誤解されるように、けっしてイングランドの「商業社会」を絶対化してこれを理想としたのではない。追いつき追いこせといっても、けっして猿真似ではない。みずからの足もとをかためて批判的見地をゆるがせにし

58) 「商業」を「分業」にとりかえる、このスミスの方法がイングランド的な商業（物質的富裕）を讃仰する、もうひとつのスミスの方法に照応したものであることはいうまでもない。

59) さきにのべた『諸国民の富』の叙述と比較すれば、すくなくともキャンナン版の『講義』でみるかぎり、初期では「大学」と「教会」が未だ「精神」の制度にはいっていない。



ていないのである。そして、それだからこそ、イングランドの **Industry** を歴史的・理論的に構成しえたし、それを肯定しえたのもであった。

初期スミスにおけるスコットランド観をさぐることは、小論のはじめに記した、かの相対主義をスミスの初心において確認することである。かれは、「鼓舞」と「用心」の両者を、あきらかに、有能なスコットランドの青年たちによびかけた。かれは、みづからをイングランド(先進)とスコットランド(後進)とへの、「公平な同感者」たらしめたのである。

だが、そのような「同感者」でありえたのは、これもはじめにのべたように、18世紀スコットランドが一方では最後進性をはらみつつも他方では最先進性に上昇しうる歴史的条件と地すべりの近代化をもちえたからであった。スミスが偉大であるのは、かかる歴史的条件を十二分に利用して、その祖国と時代の声をうたいあげたからである。

ところで、すでに察知されるように、スミスは、制度としては常備軍と教育に、「精神」そのものとしては、言語や科学や学問、芸術や武術や体育に、つよい関心をよせた。その「市民社会史」は逆にこうしたものの歴史をうかびあがらせるのである。スコットランド歴史学派にかぞえられる歴史家たちのおおくもまた、軍備や教育や科学史にふかい関心をもった。言語の起源や歴史についてもモンボドゥ卿の主著やスミスの論説が発表された。かれらの歴史意識が経済(物質)の意識であるとともに、政治の意識であり、さらに「精神」の意識であることを、かれらのなかでは、おそらく、もっとも経済への意識の大きかったスミスみづからが示したのである。

われわれは別の機会に、『諸国民の富』におけるスミスのスコットランド観を、「物質的貧困」と「精神的豊富」の視角から、あらためてとりあげるであろう。そのさい、小論において提示した初期スミスの命題が見事に再現するさまを、さらに、小論で「精神的豊富」と名づけた諸項目の主要部分が後半体系として結晶するさまを、人はみるであろう。